

‘2018 年頭のご挨拶

新々新年

新々新年



新春元旦早朝の仁木自然農園の月見橋からの全景。右端に12月に組んだ納屋の骨組みが見える。

ひょうげ へうげナお正月

～初めての年越し、迎春の記～

まほろば主人

宮下周平

事始めの言初め。

新年早々、甚だ私事わたくしごとから書き始めます事、ご寛容のほどを。

母と姉の怪我

昨年末のクリスマス、恵庭の母が風呂場で転んで、ひどく体を打ってしまった。顔が腫れ上がり、目の周りが黒ずんだまま、中々色が引かないで年を越そうとしていた。すると、近所に住んで居る姉が、同じ日に転んで、今度はあばら骨を折ったというのだ。二人とも独り暮らしだから介添えもなく、さぞや不自由な毎日だっただろう。それからしばらくして、母が病院に行ったらレントゲンを撮ると、何ともあばら骨が折れていたというのだ。同じ日に同じ患部を骨折していたとは！ いやはや、何とも…。

さて、仁木では

仁木では、農閑期に入ったとはいえ、何かとやるべきことに追われ、中々店には帰れず仕舞いでいた。しかしながら、さすが年末のメ市・酉市には帰社せねばと25日を予定していた。ところが、未だ聞いたこともない、あの爆弾低気圧が北日本を襲い、殊に北海道は、今冬早い寒波と積雪の上に、追い打ちをかけるかのように吹き荒れた。仁木では、これも聞いたことも

ない異様な風の地鳴りは、身震いするほど恐ろしい。ガラス窓越しの風景も白一色で全く先が見えない。家内は、怖いから札幌には行きたくないと言い出した。(困ったなー)と、内心思うものの、同意せざるを得なかった。

そんな折、息子が札幌から帰る予定で、家内がどうしても止めたい。だが何度電話しても繋がらない。私も同じようにしたが繋がらなかった。その内、夕暮れ前に、息子から電話が入った。余市で事故ったというのだ。ホワイトアウトで、一寸先が見えず、先の一台の車がカーブを曲がり切れずにストップ、二台目が右に切り、そこに突っ込むばかりの処、避けて左のレーンにぶつけて止めたと言うのだ。次の日も空模様は、好転せず、行くのを思い止まるに早かった。漸く帰れたのは3日目だった。

札幌では

札幌は、思いの外、雪も少なく風も無い。しかし、小別沢の長老・伊部さんの育苗ハウスは爆弾突風で、根刮ぎ^{ねこそ}持って行かれたという。70年で初めての事だという。

そんな中、久しぶりに市場に行くと懐かしい面々に会った。

この半年以上、市場に来ていないのに、ずっと通っていたかのような何の違和感も隔絶感も不思議となかった。それは、30年以上通い詰めたから、その連続で体がすぐ反応するのだ



ろう。時のいたずら、面白いものだな、と感じた。久方ぶりなので、慣れると気付かない事々が一目瞭然に感じられる。それは、この市場の活気が失せたということだ。何だろうか。一つには、元々の産地、畑も漁場も、今年は低迷に低迷を重ねて修復が難しくなっている。殊に漁場の不漁は甚だしい。魚が来ないのだから、これは人間業では如何とも戻しがたい。そんな訳で、魚介の入荷が激減、かつてないほど不景気なのだ。

そして、青果ではレタスのセリが、一箱19玉入りで1万5000円。年末とは言え、1玉7～800円原価のレタスをどうやって売り、誰が買うのか。信じられない事態だ。仲買か、小売かが、身銭を切って負担し、半値以下で捌くのだろう。世の中、何か気分が違って来ている。想定外ということがあるが、その思惑の外で、個人の身边にも、どこかしこにも起こり始めている。それが、天災地変でなければよいが……。

何もない大晦日

最後の大晦日、店がメられたのが午後5時、みんなで最後の3本メで終えたのが6時。創業以来の早さだ。内心、(初めから「紅白」が観れるぞ!) と思ったものだった。和気藹々の内に三々五々それぞれ家路に着いた。

そこで、これから仁木に帰るか否か、と思うものの、何とも決め兼ねていた。今夜は用心して元旦の早朝に帰ろうと、家内と二人して決めた。

これからは、どこの家でも年取りの席を設えであろう。ところがお節は売っていたが、お節



元旦の朝1時半の店前。雪がシンシンと降っている。「寿福」の縁起看板の通り、一家一族の幸運をお祈りしたい。

は買ってもしないし、作ってもいない。元の住み家は、料理が叶わない台所事情。もらったみかん5個だけ食べて、今年の食べ納めとしたのだ。

それに加え、テレビが無い。楽しみにしていた「紅白歌合戦」で、心の切り替えをしようと思ったのだが、それさえ出来ない。除夜の鐘の音も聴こえず、全国各地の迎春の風物詩も見られない。一風呂浴びて、あとはただ寝るだけ。



伝統と情報

伝統食というお節料理を作り、家族して食べることで、日本人として古き情緒を感じて祖先を思い子孫のことを思い致すであろう。そんなこの家庭でも、この日この時この場所で、同じような食卓で団欒することが、家族の絆、ひいては国民として国の絆を強く結ぶのだろう。この正月の孤独の中では、ちょっと国にまで思いを馳せることは出来ない自分が居る。つまり、この伝統という行事や風習が、心に及ぼすことの大きさを思うのだ。それが家族から、地域へ、郡県へ、そして国、それから国々へ世界へと数珠繋ぎに繋がって行くのだ。繋ぎ継いでゆく伝統行事の風習の持つ大切さを、逆に噛み締められている。

それが、7時半なのだ。こんな大晦日、生まれて初めてだ。無い無い尽くしの大晦日も、ちょっと乙なもの、と妙に感じ入った。

それに、加えるに、毎年実家に帰って新年の宴を親戚と過ごすのに、件の母が目の周りが隈だらけであんなだから、兄と相談して取りやめにしたのだ。まあ、忘年も新年も無い年は、とにかく67年間で初めてなのだ。何か、不思議と、重なる年合わせである。

すると、目が覚めたのが未だ大つごもりの11時頃か、それから目が冴えに冴えて、いろんな事が頭の中で駆け巡って、独り興奮して眠れないのだ。あれもこれも、思いが飛び交って益々目が冴える。それではと、独りこっそり起きて会社に行き、夜中の1時頃からこの原稿を手始めに書き始めた。何とも言いようのない正月一日だ。な一、と自分ながら悦に入ったかもしれない。

しかし、同時にテレビを観ないことで、静かで穏やかな自分を取り戻すことを発見するのだ。同じ大衆化がテレビの媒体により、本来を



失うまで心の領域が侵されている自分を知る。過剰で夥しいCM。それが必要以上に心に垂れ流され、刷り込まされていることに中々気付かない。その畳み掛けが、固まって常識化する。その同じ意識場で動く国民。同じ想念で生きて行く日本。流行にそぐわない生き方が弾かれてしまう社会。これはおかしい。殊に青少年、幼児に与えるとてもない影響の怖さは、図りようが無いのではなからうか。CMで流される商品のほとんどが、身体や精神に有益なもののかに少ないか。不要な物がいかに多いか。企業利潤の為、不誠実な商品がいかに氾濫しているか。それを毎日毎時間、シャワーのように間断なく浴びせられるのだ。

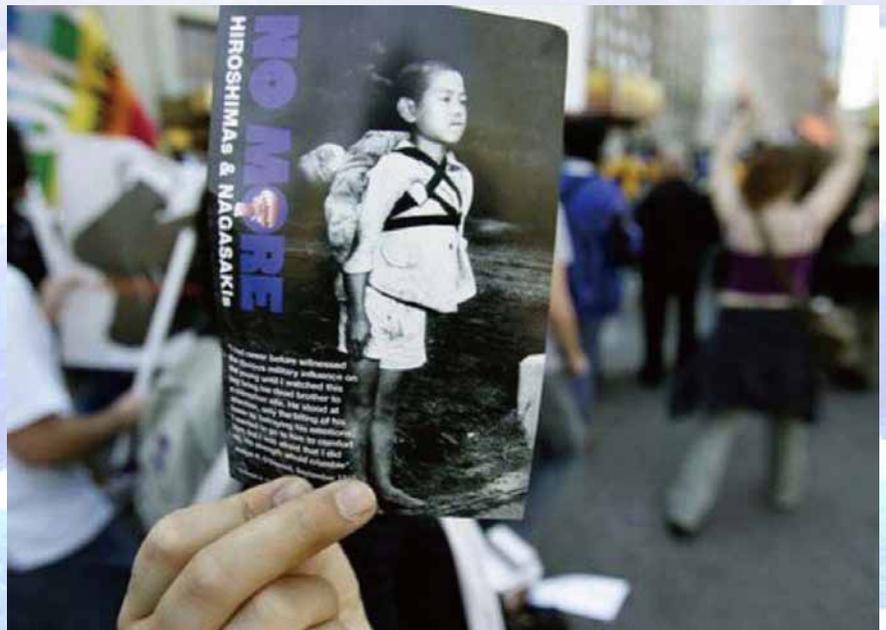
報道関係も、一方的に偏向情報を流すことで、国民を誘導しているのかもしれない。それは個人や国全体においても。知識や情報の獲得の速さや多さが、果たして人間性の豊かさや見識の深さのように錯覚してしまいか。知ることで、幸せになれない。そして、本当に知るということは見聞によっては得られないことを知るべきであろう。

それは、30年以上、野菜の顔を見て来て知ったつもりでいたが、土に触れてみて、それがどれだけ知らなかったか、これからも知れないということを知っただけでも、本当の収穫だったかもしれない。

だから、テレビや新聞やネットなどの情報から一時離れる、故意に離れてみる、何も所属しないところで、改めて見てみる、重ねて考え直してみる。そんなことで、新たなる視点や気づきが起こるかもしれない。それが断捨離の特効なのであろう。それにしてもテレビの魔力は凄まじい引力と影響力がある。

偏向報道と自虐史観

そう感じた元旦、新聞に掲載されたという記事を知った。それは長崎原爆投下の惨事。『『NO MORE HIROSHIMA & NAGASAKI』 亡くなった弟を背負い、火葬の順番を待つ少年。少年の悲しみは、かみしめて血のにじんだ唇に表れている』との添え書きと共に、バチカン・フランシスコ法王が、この「焼き場に立つ少年」のカード配布を世界に命じられた、という。





それは、1945年長崎の原爆投下現場で、従軍カメラマン故ジョー・オダネル氏が写した、国内では知られている一葉だ。それが、「核なき世界」核兵器廃絶への法王のメッセージであった。

米朝間の核弾頭による一触即発の今、市民を巻き込む大惨事の悪夢が再びと起こらないことを、共に祈りたい。

そもそも、この原爆投下が何故なされたか、遡って第二次世界大戦が、何故起こったのか。何故日本が、真珠湾に仕掛けたのか。実は久しく闇の中だった。

その真相が、何と今日、明らか^{こんにち}にされたのだ。70年の封印が解かれた、その驚愕の内容。歪められ、隠されて来たことで、全く真実が伝えられていなかった。

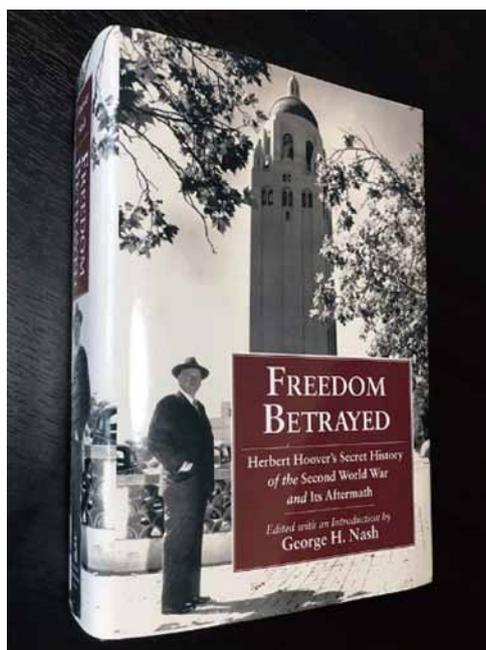
その名は、一冊の回顧録「裏切られた自由」。著者は、第31代アメリカ大統領フーヴァー米大統領（任期1929～33）。第二次世界大戦の隠された歴史とその後遺症が

綴られている。一言、「日本に戦争を仕掛けたルーズベルトは、MADMAN/狂人！」

太平洋戦争、あれは、米国に仕掛けられた戦争！だったのだ。ヒットラーのホロコースト以上に史上最凶悪な原爆投下！既に敗戦が明らかだったにも拘らず、対ソ連への牽制の為、原爆の威力を試すため、無辜^{むこ}の民人を虫けらの様に焼き殺したのだ。1946年(昭和21年)5月3日、東京で、元大統領フーヴァーと連合軍最高司令官マッカーサーは「太平洋戦争とはいったい何だったのか」を3日間にも渡って話し合った。「太平洋戦争は、日本が始めた戦争じゃない。あのアメリカの『狂人・ルーズベルト』が、日米戦争を起こさせた。気が狂っていると言っても精神異常なんかじゃない、ほんとうに戦争をやりたくてしょうがなかった…その欲望の結果が日米戦争になったのだ」その言葉を聞いて、マッカーサーははっきりと同意したという。



「いかなる詭弁を用いようと、原爆投下の主目的が、戦闘員ではなく女子供老人などの非戦闘員の殺傷であったことを否定することはできない。そもそもアメリカは日本を挑発しなければ決して真珠湾を攻撃されることはなかつただろう。」



自国に誇りを持たない自虐史観の教育を、戦後私たちは受けて来た。愛国という言葉さえ忌み嫌われる国民に仕立てられた。米国の挑発に乗り、^{はま}罠に嵌った奇襲作戦後、ルーズベルトとチャーチルは互いに電話で歓喜に狂ったと伝えられた。今日までの報道とは遠く離れた真逆の事実、それが、47年間の禁断の書、フーヴァー元大統領の回顧録が公開され、戦後約70年経ってそれが衆目に晒されることになった。

真実を知るには、何と時間がかかることであろうか。そして、何と多くの犠牲を伴うことであろうか。それを修復するには、余りにも多くの時間と努力を要するのだ。だが、それを遺された私たちがせねば、誰が真実を後代に伝えてくれるのだろうか。

昨年度の「ノーベル平和賞」国際NGO「核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）」。



その授与式での被爆者サーロー節子さんのスピーチを忘れてはならない。

新しい朝、そして年へ

かくも、お節や紅白に会えなかったことで、とんでもないプレゼントがもたらされた正月早々の記なのである。ささやかな気付きと手に余るほどの新事実、これからの生き方、今年の過ごし方がおぼろげ乍ら見えて来た。

次第に夜も白々と明けて来て、少々目がトロリとして眠気が差して来た。何とも奇妙な元旦の朝、どんな初日の出が拝めるのであろうか。しかし、これから、仁木に帰らねばならない。帰路、快晴の中、初めての余市神社、仁木神社に^{はつもうで}初詣して、産土の神々に感謝と護国平安なるを祈った。これから、3年目の仁木生活が始まるのだ。

今年は創造の年

今年は、アッというような新製品を何点か、開発製造して発表しようと目論んでいる。新春

から経営のことも農のことも商品のことも、頭が一杯であるが、見渡す限り雪一色の風景を見てみると、魂が吸い込まれて、何の困難も感じなくなるから不思議だ。もう一皮剥けたまほろぼの再出発としたい。

改めて、新春のご挨拶

ここに、お客さまには改めて昨年中、厚くご愛顧賜り、甚だお世話になりましたことを感謝申し上げます。

また、留守中、^{しっか}確りと店を守ってくれている店長、編集長初め社員・従業員一同の並々ならぬ精進に、慰労と感謝の意を伝えたい。

今年も皆様方には、相変わりにませずに、ご指導ご鞭撻のほどを頂けますよう、お願い申し上げます。

この一年、益々のご健康とご発展ありますように、お祈り申し上げます。

2018.1.1. まほろぼ主人
宮下 周平

